（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	劉　驫
論文題目	日本語と中国語の文脈指示詞の研究 － 談話モデル理論からのアプローチ －		

（論文内容の要旨）

本論文は、日本語の指示詞コ・ソ・アと中国語の指示詞「这」と「那」の文脈指示用法のメカニズムを、談話という観点に立ち、談話モデル理論という理論装置を用いて解明しようとしたものである。全体は９章からなる。

第１章では、日本語と中国語の指示詞に関する先行研究を概観し、その問題点と残された課題を指摘して、本論文が採用する研究方法・理論的枠組み、及び資料として用いたコーパスデータを説明している。

第２章では、日中の文脈指示に関する先行研究を紹介し、特に庵（2007)を詳しく取りあげている。庵（2007)は文脈指示を扱った数少ない研究であるが、本章では庵の考察には多くの問題点が潜んでいることを指摘している。

第３章では、理論言語学における指示詞研究の理論的枠組みを検討し、東郷 (1999)の談話モデル理論を枠組みとして用いる理由を述べている。談話モデル理論はメンタル・スペース理論を発展させたもので、心的モデルの中に共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域という下位スペースを設定している。

第４章は談話ジャンルと談話モードの問題を扱っている。従来の指示詞研究は小説や新聞記事などの限られたタイプの言語資料をもとにしているが、本論文に先立つ研究において、指示詞の出現率は、ニュース・文学書籍・自由会話などの言語資料のタイプに大きく依存することが明らかになっている（劉 2011）。本章では談話ジャンルの上位概念として、「対話モード」「語りのモード」「情報伝達モード」の３つの談話モードを設けることを提案している。対話モードは、話し手と聞き手が役割を交代しながら発話するモードであり、共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域のすべてが発動され、コ・ソ・アが全部用いられる。語りのモードの典型は昔話で、聞き手は不特定多数であり、語りの時間軸に沿って出来事が展開する。発動されるのは言語文脈領域で、指示詞の基本は文脈指示のコ・ソである。聞き手の物語への参入を容易にするため、話し手はあたかも聞き手と同等の立場で語りを展開する態度を取り、話し手側の言語文脈領域と聞き手側の言語文脈領域は融合するとしている。情報伝達モードの典型はTVやラジオのニュース報道や商品の取り扱い説明書で、話し手は情報の占有者として振る舞い、聞き手は不在か不特定多数である。情報伝達モードではコが最も多く用いられる。

第５章では談話の内部構造の問題が論じられている。先行研究を踏まえて、本論文では談話の構造として「導入部」「展開部」「終結部」という３つを提案している。導入部は談話の冒頭で登場人物を導入し、語りの背景・舞台を設定する。導入部の多くは時間の流れを持たない。展開部は物語の中心的部分で、時間軸に沿って出来事が展開する。また展開部は語りの主要な出来事が語られる前景部と、付帯状況や登場人物の内言を語る背景部に分けられる。最後に終結部は、語りを終結させる部分であり、時間の流れを持たず多くは背景である。

第６章ではこれまでの章で定義した談話モードと談話構造の概念を用いて、日本語と中国語の指示詞の実例を引いて、談話モデル理論に基づく詳細な分析を展開している。まず語りのモードで用いられる指示詞はソが多いが、これは話し手と聞き手が融合した言語文脈領域を発動させ、言語文脈領域のデフォルトはソだからである。しかし、導入部、および展開部の背景ではコも用いられる。導入部においては話し手の主導によって登場人物が導入され、また展開部の背景では登場人物にたいするコメントや主観的評価が語られ、話

し手は言語文脈領域と共有知識領域のリンクを利用するためであるとされる。中国語の指示詞についても同様の分析を行ない、中国語では導入部では近称の「这」が、展開部では「这」も遠称の「那」も用いられるが、終結部では「这」が多く、また前景部では「那」が背景部では「这」が多く用いられることを明らかにしている。

第７章では情報伝達モードにおける日中の指示詞の用法を分析し、日中ともに近称のコ・「这」が多く用いられることを明らかにしている。

第８章では対話モードにおける日中の指示詞の用法を分析し、文脈指示詞のデフォルトはソだが、話し手がトピックに深くコミットしている場合や、包括的なトピックにはコが用いられることを示している。このような分析を通じて、文脈指示用法は、距離区分原理に基づく現場指示用法と断絶したものではなく、ゆるやかに連動していることを明らかにしている。また日本語と中国語の指示詞の用法に見られるちがいは、両言語の言語文脈領域から共有知識領域への情報の転送原則の差によって説明できるとしている。

第９章では本論文のまとめと意義、および残された問題と今後の展望が述べられている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、日本語の指示詞コ・ソ・アと中国語の指示詞「这」と「那」の文脈指示用法のメカニズムを、談話という観点に立ち、談話モデル理論という理論装置を用いて解明しようとしたものである。

指示詞には現場指示用法・文脈指示用法・観念指示用法があるが、現在までの研究の多くは現場指示用法を中心に扱っており、文脈指示用法の研究は少ないのが現状である。本論文は研究が手薄な文脈指示用法に特化してコとソの使い分けを究明しようとした研究であり、その学問的意義は大きいと言える。

また従来の指示詞研究においては、指示詞の使い分けの説明に用いられる概念が明確に定義されておらず印象に基づくものが多かったが、本研究は談話モデルという心的モデルを用いて指示詞の用法を理論的かつ明示的に解明しようとしている点も高く評価できる。

また従来の研究の多くは、小説や新聞記事など特定の談話ジャンルから用例を収集しているが、このような方法が指示詞研究にバイアスをかける結果となったことを本論文は明確に示している。すでに劉（2011）で明らかにしたように、ニュース記事や小説・論説・会話などの談話ジャンルによって、指示詞の出現率は大きく異なる。ニュース記事ではコがほとんどでソは少なく、小説などではコもソも用いられ、会話ではソが多くコは少ない。この出現率のちがいを説明するために、本論文では談話ジャンルの上位概念として、「対話モード」「語りのモード」「情報伝達モード」の３つの談話モードを提案している。本論文の重要な貢献は、単に談話モードを分類しただけに留まらず、それぞれのモードにおける言語使用の様態を、談話モデル理論という理論装置を用いて詳細に解明していることである。談話モデルは、共有知識領域・言語文脈領域・発話状況領域という３つの下位領域を設定している。話し手と聞き手が会話を交わす対話モードでは、この３つの領域のすべてが利用可能であり、現場指示のコ・ソ・ア、文脈指示のコ・ソ、観念指示のアのすべてが出現する。語りのモードで利用可能なのは基本的に言語文脈領域であり、文脈指示のソとコの使い分けが問題となる。

本論文では「村人たちがたつ平にお嫁さんを見つけてきました。これがなかなかの働き者のお嫁さんです」のように、話し手が登場人物に補足的コメントを加えるような場合は、言語文脈領域と共有知識領域とを結ぶリンクをたどって、共有知識領域に格納されている談話情報にアクセスしているとする。この情報は話し手側の共有知識領域にのみ格納されている情報であり、話し手が自分に近いと捉える情報である。本論文ではこの点に指示詞の現場指示用法と文脈指示用法との連続性を見ている。現場指示用法ではコは近称であり、話し手の近くにあるものを指す。一方、すでに言語文脈領域に書き込まれていて、話し手も聞き手もアクセスできる情報はソで指すが、現場指示用法でソは中称であり、ここにも類似点が見られる。

庵(2007)は現場指示用法と文脈指示用法はまったく異なる原理によっていると主張した。距離区分原理もしくは人称区分原理に基づく現場指示用法とはちがって、文脈指示用法はテキスト上の結束性によるというのであるが、こうすると両用法の連続性が失われてしまうことが大きな欠点であった。これにたいして本論文は、言語文脈領域と共有知識領域とを結ぶリンクの利用、および話し手側の言語文脈領域と聞き手側の言語文脈領域の融合という分析によって、現場指示用法と文脈指示用法とはゆるやかに連続していることを明らかにしており、これは日本語の指示詞研究を大きく前進させるものである。

加えて本論文の貢献のひとつとして指示詞の日中対照研究が挙げられる。日本語の指示詞がコ・ソ・アの３区分であるのにたいして、中国語は「这」と「那」の２区分

であるため両者の対応関係が問題になる。本論文では両言語における指示詞の文脈指示用法を詳細に検討して、その異同を明らかにしている。

このように本論文は、日本語と中国語の指示詞の文脈指示用法についての包括的かつ理論的な研究となっており、その学問的意義は高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２６年２月３日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　平成26年 4月 1日以降